



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 73 号 2017 年 10 月 24 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

＜特集：青年心理学研究の国際化・グローバル化～その可能性と注意点～＞

小塩真司：外発的・内発的な国際交流	1
高坂康雅：国際学会から見た“世界”	2
畑野 快：青年心理学者の国際的なプレゼンスを高めるために	3
天谷祐子：英語プレゼン講座を本務校で受講して	3
山本ちか：国際学会への参加経験を振り返って思うこと	4

＜書評：私のおすすめ、この 1 冊＞

小沢一仁：立花 隆（著） 講談社文庫（1988 年刊） 『青春漂流』	4
---	---

＜広報＞

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ	5
事務局からのお知らせ	6

＜特集＞ 青年心理学研究の国際化・グローバル化～その可能性と注意点～

研究を国際的に展開することの重要性が学会大会などでも議論されています。そこで、国際的に活躍されている 5 人の先生方に原稿を依頼し、ご自身の経験や周囲の状況も踏まえながら、その可能性と注視点について執筆していただきました。会員の皆様におかれましても、青年心理学研究の国際化・グローバル化について再考していただき、是非ともニューズレターに投稿していただければ幸いです。
(担当：家島明彦・則定百合子)

外発的・内発的な国際交流

小塩真司（早稲田大学）

私の研究者としての海外とのつながりは、私自身が意図して始めたものというよりも外圧によって否応なく始まったものであった。2006 年の夏、とある米国の心理学者から送られた日本パーソナリティ心理学会あてのメールを、なぜか私が受け取った。その内容は、日欧米で学会どうしの国際交流を進めないかというものだった。そのメールを学会に転送したところ、いきなり私が国際交流委員長に任命されたのである。その当時、確かに私は米国学会の会員ではあったのだが、それはその学会が出している雑誌を手元で読みたかったからであり、国外の学会で研究発表をしたことも参加したこともなかった。そのような状況で、突然国際交流を強いられる立場に置かれたのである。その当時のいきさつについては、『日本パーソナリティ心理学会 20 年史』（福村出版、2015 年）に短い記事を執筆したので機会があればご覧いただきたい。

たとえきっかけが何であれ、10 年という年月はずいぶん意識も行動も変えるものがある。海外の学会に何度か参加することで次第に多くの研究者と知り合い、一緒に論文

を書くようになっていった。この原稿を書いている 2017 年現在は、最初の頃に知り合った研究者に受け入れてもらい、特別研究期間に Visiting Researcher としてテキサス大学に滞在している。やはりこれも、2006 年以前の私には考えられない状況である。

院生時代、海外で発表したほうが良いと何度か指導教官から言われたのだが、なかなか最初の一步を踏み出せずに躊躇していた。今この記事を目にしている研究者や院生の中にもそういう人がいるかもしれない。私の場合には、海外への最初の一步を踏み出し、その後歩き続けてみることは、自分の研究者人生を大きく変えることにつながっていった。自分自身のこの経験はいつも、外発的動機づけと内発的動機づけの連続性を思い起こさせる。

海外に出ることが当然とされる研究分野の研究者からすれば、それを躊躇することは「何をいまさら」と感じることだろう。ただし、心理学の中でも研究領域によって国際化には違いがあり、議論の難しさにも違いがある。同じ労力をかけて比較的容易に海外の研究者と議論ができる研究内容と、そうではない内容があるということである。

しかし現在の日本の研究者が置かれた状況を考えれば、何らかの形で国際的な活動を行うことが望ましく評価される方向に進んでいるのは確かである。研究者が生き残るための国際化という問題がここにはある。

もっとも、海外に行けばそれだけで偉いというわけではない。海外の学会に行って発表を見回した時に「これは面白い」と思うことはできるだろうか。参加して何か得るものがないと、海外の学会に行く意味はあまりない（観光をして見聞を広げることはできるだろう）。国際共同研究をしようにも、海外の研究者にとっても何か得るものがないと、一緒に研究しようとは思わないだろう。双方にメリットがあれば、その関係は継続し発展していくものである。

国のためとか、学会のためとか、所属機関のためとか、キャリアアップのために国際的な活動をするのは、正直言って面白くないと私自身は感じる。自分がその活動自体を面白いと思うことができればそれが一番である。そして、その面白さが感じられるからこそ研究者になったのだと思い続けることができれば、幸せなことだろうと思う。

国際学会から見た“世界”

高坂康雅（和光大学）

2015 年の日本青年心理学会第 23 回大会にて、国際交流委員会企画シンポジウムに登壇させていただいた。そこで私は「脱・国際交流風活動を求めて」と題して、海外の理論を無批判に輸入することや海外の尺度の邦訳などの問題点を指摘し、（日本の）青年のためとなる研究を丁寧に行うことの重要性を論じた。学会が ICP2016 に向けて、国際交流を推進しようとするなか、実に空気を読まない話題提供であり、色々な意見をいただいた。

その後、2016 年 7 月に横浜で開催された ICP2016 で初めて国際学会に参加し、ポスター発表を 2 件行った。また、2017 年 5 月にはオランダ・グローニンゲンでの International Society for Research on Identity (ISRI) に、8 月末にはオランダ・ユトレヒトでの European Conference of Developmental Psychology (ECDP) に参加し、口頭発表を行った。これらの学会への参加や発表で感じたことは、やはり冒頭のシンポジウムで考えていたことは間違っていなかったということであった。海外の研究者は、研究発表に関心をもてなければ、一切質問をしない。日本では（あるいは青年心理学会では）、誰かは質問をするものであるが、そんな雰囲気はない。そして、そのような関心をもたれず、質問されない発表の多くは、調査した国が違うだけ、得られている結果に新しさが無い、というようなものであった。それはまさに冒頭のシンポジウムで私が危惧した日本の研究者がよくやる「国際交流風活動」であった。

私は ISRI では「リスク回避型モラトリウム」（高坂、2016）について、ECDP では「恋人を欲しいと思わない青年」について、それぞれ口頭発表を行った。どちらも、海外の理論に基づかないオリジナルの研究である。海外の研究者はこれらについて熱心に発表を聴き、いくつかの質問もしてくれた。そのなかには、研究に関するもののあった一方、日本の青年や社会などに関する質問もあった。日本の学会では説明しなくてもよいことを尋ねられる、

そして答えられない。しかし、このような研究の背景・バックボーンである日本の青年や社会など説明しなければ、日本での研究で得られた知見の意味や意義は理解されないのである。

日本の“あたり前”を言語化する。新たな課題を見出して、11月、Society for the Study of Emerging Adulthood (SSEA) に向かい準備する日々である。

青年心理学者の国際的なプレゼンスを高めるために

畑野 快 (大阪府立大学)

Facebook や Instagram などの SNS (Social Network Service) を見ていると、教員や大学院生が国際会議に参加し、発表したという投稿をよく目にする。私が知らなかっただけかもしれないが、以前に比べて国際会議に参加し、発表する青年心理学者は増えていると思う。国際会議では、日本とは異なった視点から研究に対するフィードバックを得られるため、その参加は、自らの研究を国際的な視点から位置付ける上で、非常に意義があると思う。その一方で、日本の研究者は、国際会議での発表を通して、海外の研究者と本当に“良い”インタラクションをしているのだろうか、とも思う。なぜなら、私が参加する学会において (例えばヨーロッパ青年心理学会: European Association Research on Adolescence), **keynote speaker** 等で話す日本人はほとんどおらず、そのプレゼンスは非常に低いと感じるからだ。私は、これまで何度か国際会議で発表してきたが、そこで感じたことは、発表を通して海外の研究者と何かしらのインタラクションは生まれるものの、自分の研究をそれほど意義のあるものとはみなされない、ということだ。結局、研究成果が信頼に足るものと認められるためには、その成果が論文誌として公刊されなければならない (もちろん国内誌でも同様であるが)。特に、インパクト・ファクターが高い論文誌であるほど、多くの人の目に触れ、その意義は認められる。そのため、自身の研究成果を海外の研究者にしっかりと伝えていくためには、名刺代わりとなるような論文をとにかく 1 本書くことが大事だと思っている。論文が公刊され、世界中の人々に読まれ、引用されることで、研究成果の意義が“正式に”認められる。その後、顔を合わせて初めて“良い”インタラクション生まれる。こういったプロセスを経て、海外研究者のコミュニティに参入することができ、また、彼らのコミュニティに日本人が増えていくことでそのプレゼンスは高まっていくだろう。初めて国際学会に参加した時は、学会場にいる“旅行者”のようであり、日本人のプレゼンスを高めることなど考える余裕もなかった。しかしながら、今は、海外の研究者のコミュニティに参入し、日本人のプレゼンスを高めるために、とにかく論文を書き、採択されるように努力している。

英語プレゼン講座を本務校で受講して

天谷 祐子 (名古屋市立大学)

私の国際学会デビューは遅く、職を得て 3 年後であった。なかなか英語でのプレゼンや論文執筆に効果的努力ができず困っていた。幸いなことに、2016 年度に本務校で英語プレゼン講座が開かれた。受講して得られたことを 3 点ご紹介したい。

第 1 点は、自分の存在や領域を全く知らない人に興味を持って聞いてもらうための内容的 (構造的) 工夫を、種々丁寧にやるべきという点である。特に印象深かったのは、聴衆にとってのメリット、つまりプレゼンを聞くとどのような良いことがあるのか、を意識するという点である。これは頭では理解していても、実際にプレゼンに反映させることは難しい。これを意識するだけで、焦点がぼやけたプレゼンが格段に洗練されるように感じられた。

第 2 点は、プレゼンの方法的工夫の数々である。結論は「後出しではなく先出し」だったり、最初の方では問いを投げかけたり、スライドと口頭説明のバランス、スライドの切り替えのタイミング、自分の (物理的な) 姿勢や動きのメリハリ等々の工夫である。これらの工夫を入れ込むと、最終的に伝える情報の総量は同じでも、内容への興味をもたれ方、理解のされ方は全く異なってくる。準備段階のみならず、プレゼン遂行中にもこれらの工夫を意識することで「仕上がり」は格段に良くなるわけだ。

第3点は、一緒に受講した医学・薬学研究科の理系女性研究者のたくましさだ。彼女達はどんなに時間がなくとも課題をこなそうと貪欲な姿勢を持ち、大きなプロジェクトグループの一員として、短期間に業績を上げることが必須という生活をしていた。彼女達のようにまではいかないが、私もせめて「時間がない」を言い訳にせず、地道なブラッシュアップや研究の積み重ねに取り組んでいきたいという思いを持った。

この講座の受講直後に ICP2016 が開催され、私は Oral 発表を行った。同じセッションのアメリカの発表者が、他の発表者の時には落ち着かない態度（?!）だったにもかかわらず、私の発表の際には、発表に注目し、落ち着いて聴いてくれていた。発表の内容的方法的工夫をして「成功した!」と感じた瞬間であった。

国際学会への参加経験を振り返って思うこと

山本ちか（名古屋文理大学短期大学部）

なぜ国際学会に参加しているのだろう。今回、原稿執筆の依頼をいただいて、これまで国際学会に参加した経験を振り返り、国際学会に参加している理由を考えました。思い返すと、一番のきっかけは、大学院生の時に参加した SRA (Society for Research on Adolescence) でした。Dr. S. Harter の尺度を基にした全体的自己価値に関するポスター発表を行いました。その時、幸運にも Dr. S. Harter ご本人がちょうどお隣で発表されており、私自身の研究について質問やコメントをいただくことができました。このことが単純にとっても嬉しかった。これまで論文や著書だけでしか知らなかった方々に直接お話を聴くことができ、自分の研究について意見を伺うことも可能なのだと実感し、この学会をきっかけに、国際学会で発表する姿勢がより積極的なものになりました。また今年度は、国内の学会で、英語で質問されることを経験しました。ポスター発表で、お隣で発表されたのが海外の方であったためでした。英語は全く準備しておらず、非常にあたふたしながら研究を説明することとなり、「国際学会があるからそのために」ではなく、日頃から英語での表現に慣れておく必要性を痛感いたしました。

何度かの発表経験で感じるのは、発表テーマによるのかもしれませんが、「この研究での結果は日本では一般的な結果なのか」という日本の研究全般についての質問が多いということです。また研究そのもののだけでなく、その背景にある日本の学校制度や学校環境、高校や大学への進学率、就職の状況、宗教観など、日本社会の現状についてもよく質問いただきます。こうした経験から国際学会では、国内の学会とは違った幅広い知識、特に国内では共通の認識であると思い込んでしまっている研究の背景まで説明する必要性、そしてそれを英語で表現する力の必要性を実感しているところです。

<書評：私のおすすめ、この1冊>

『青年漂流』

立花 隆（著） 講談社文庫（1988 年刊）

小沢一仁（東京工芸大学）

著者である立花隆が 11 人の様々な職業を持つ青年にインタビューをし、いかにしてその仕事と出会い、いかにしてその仕事で一人前になっていったかを描いている。その姿は、まさにエリクソン（1959）のいう「心理社会的モラトリウム」において、「自由な役割実験を通して、社会のある特定の場所に適所を見つける。適所とは、あらかじめ明確に定められた、しかもその人にとっては自分だけのために作られたような場所（西平直・中島由恵訳）」であり、その適所を得るための、さらには、アイデンティティを得るためのプロセスである。その姿がそれぞれの仕事において実に興味深い。それぞれの仕事には、特有の困難さと深さがあることが垣間見える。

さらに、あとがきで、立花隆氏は、空海の例を挙げる。遣唐使として唐に渡り密教を学び、帰国後華々しく日本の仏教界で活躍する以前に、空海にはどこで何をしていたかわからない「謎の空白の時代」があるという。活躍する以前の、適所を得る以前の期間こそ重要だと立花隆氏は語る。まさに、モラトリアムという期間をいかに過ごすか、である。

この本の初版は、1985 年に出ている。ときどきテレビで拝見するソムリエの田崎真也氏もインタビューを受けている当時の青年のひとりである。さて、今の青年は変わったといわれる。しかし、モラトリアムという期間の大切さ、そして、居場所さらには適所を得ることの難しさとそれを乗り越えた喜びはいくら時代を経ても変わらないと考えるが、それは私が青年期危機説に立つからだろうか。

最後に、学生時代に西平先生、山添先生、院生時代は高木先生にいろんな本を紹介していただいた。立場を変えて今、学生に本を紹介することがある。そんなときに紹介する中の一冊がこの本である。今アマゾンで検索すると 1 円である。本の価値はわからないものである。

<広報>

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ

第 72 号より、会員の皆様から意見や要望を募るとともに、自由な投稿・寄稿を促すことにしたとアナウンスさせていただきました。投稿・寄稿ルールについて、再度簡単に説明させていただきます。

- 会員から募集するのは、以下の 5 つです。
 - ① 特集テーマに取り上げて欲しいトピックス 「特集テーマ提案」
随時募集。過去の NL 記事を振り返りつつ、編集委員会で検討し決定します。
 - ② 書評に取り上げて欲しい書籍 「書評推薦図書」
随時募集。原則として最新号発行 1 ヶ月前に集約し掲載します。
 - ③ 書評執筆の希望 「書評執筆希望」
掲載書籍への書評執筆の希望者を、原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。
該当書籍をお持ちでない場合には献本いたします。
 - ④ 次号の特集テーマに関する投稿の申し込み 「特集テーマ投稿希望」
特集テーマへの投稿希望者は、原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。
 - ⑤ 会員からの情報や意見の自由投稿 「投稿：会員から」
随時募集。投稿内容が本学会の NL の記事に相応しいかを編集委員会で検討し、掲載の可否を決めます。不掲載の場合は、投稿者に理由を開示します。
- 投稿・寄稿時には、必ず件名を「」内の通りとし、本文の最初にお名前と所属・連絡先メールアドレスをお書きください。
- 書評および特集テーマへの執筆候補者は基本的に以下のように決定します。なるべく執筆希望者を優先しますが、編集委員会において会員の先生方の専門や経歴のほか、最近の寄稿状況を把握し検討したうえで執筆候補者を絞り込み、改めて執筆を依頼します。
- すべての投稿先は、jsvap-nec@googlegroups.com（日本青年心理学会広報・ニューズレター編集委員会）です。
- 原稿の字数は 800 字程度を原則とします。

- 第 74 号の特集テーマは「日本青年心理学会第 25 回大会」です。大会に参加された会員の皆様に、忌憚のない意見や感想、コメントなどを寄稿いただけると幸甚です。投稿希望の申し出の締切は、大会 1 週間後の 12 月 3 日（日）24 時です。

事務局からのお知らせ

I. 学会メーリングリストをご利用ください

- ・現在、電子版ニューズレターや大会・研究会などの案内を、学会メーリングリストによって配信しています。会員であれば、青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなどの案内を、このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上、事務局からのみの発信となりますが、どうぞご利用ください。

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室内
TEL : 075-753-3047
E-mail : seinenshinri@gmail.com
Website : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>
振替口座 : 00940-6-273417
口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願いいたします。